

Contents

性教育バッシングの現場から	1
特集：フェミニズム	2
CGSからのニュース	4
日本からのニュース	6
女性の労働力問題	8
Amid Sex Education Bashing	1
Feature: Feminism	2
News from CGS	4
News from Japan	6
Women and Labor	8

性教育バッシングの現場から

市民から「とんでもない性教育」への抗議があった、と議員が国や各自治体の議会で突然問題にする。そして「望ましくない」旨の首長らの答弁を引き出す。同時に、ある新聞社が実態も確かめずにいかにも「ひどい」という記事を載せる。一方で問題化を恐れた教育委員が予め性教育を抑えにかかる。時には処分をちらつかせて。こうした連携プレーのような攻撃が2002年から明確に始まり現在も続いている。

「過激」「ゆきすぎ」という言葉の連呼によって危機感だけが人々の意識に刷り込まれていくが、何をもって過激・ゆきすぎなのか—なぜ性器のついた人形が、子どもに性器の名称(ペニス・ワギナ)を教える事が「過激」なのか—が議論されることはない。そして小学校の教科書からペニス・ワギナの言葉が消え、中学校では「性交」は「性的接触」に変わった。翻って子どもたちの性を巡る現実はどうか。ここに事細かに書くことはできないが、たとえば携帯やネットを使った性の被害、クラミジア等性感染症の増加、予期しない妊娠などのトラブルは特に10代に著しい。それは大人からの加害だけでなく、10代同士の無知ゆえのものも多い。低年齢の時期からの的確な「いのちと健康の教育」、さらに思春期以降の「人権と共生の教育」が求められる所以である。

Sex Education Bashing in Japan

All of a sudden, a councilor brings a citizen's protest against a particular incident of 'outrageous sex education' into the national parliament or a local government assembly. Then, he or she draws a reply such as 'undesirable' from the chair. At the same time, some newspaper posts an article presenting the case as 'terrible' without verifying the facts. The Board of Education swiftly moves to keep the issue under its control. Such 'co-ordinated' attacks on sex education began in 2002 and have continued until the present day.

Repeating words such as 'radical' or 'excessive' imprints only a sense of crisis in the public consciousness, but there is no discussion regarding just what it is that is so radical or excessive – about the use of a doll with reproductive organs as a teaching aid or teaching children names such as penis or vagina, for example. Terms like penis and vagina have disappeared from elementary school textbooks, and 'sexual intercourse' has been replaced by 'sexual contact' in middle schools. So just what is children's sexual reality? Teenagers are especially subject to various sexual problems such as sexual harassment via cell phones or the internet, the spread of Chlamydia and other venereal infections, and unexpected pregnancies. They are caused not only by adults but also the ignorance of teenagers themselves. That is why accurate 'life and health education' from a young age and 'human rights and coexistence education' after early adolescence are required.

しかしバックラッシャー達は、「こうした現実には過激な性教育が招いたものであり、学習によって子供に力をつけるのではなく“禁欲”をこそ教えるべし」と主張しているようだ。文科省などもそれに追従し始めたようだが、これはブッシュ政権の復古的な純潔教育と通底するものといえよう。

性というテーマは人々の意識の最も深い処にあり、最も動きにくいものだ。しかし20世紀後半、国際的な動きを背景に、性とジェンダーの教育はその固い意識にメスを加え始めた。今日のバッシングはそれに危機感を抱く勢力が巻き返しを図って、人々に変革への不安を煽っているのだ。つまり、これは単に性教育だけの問題ではなく日本の保守化の一環なのだ。そして、今それは成功を収めつつあるように見える。

私たちは権力を持たない。しかし子どもの、そして人間の幸せや、いのちと性と人権を大切にすることをすすめる熱意はいささかも揺らいではない。教育関係者のみならず医療・福祉分野の人々、さらに保護者、市民の方々につながる言葉を紡ぎ出し、絆を強め、困難だが誇り高い仕事の前進のために力を尽くしたい。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/c_/006/
“人間と性”教育研究協議会代表幹事：村瀬幸浩

However, proponents of the backlash movement insist that this situation has been brought about by radical sexual education, and children should therefore be taught 'continence', rather than given empowerment. The Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology seems to be complying with this opinion –this is fundamentally similar to the reactionary sexual morality education of the Bush administration.

Sex is the deepest and most fixated theme in people's consciousness. Nevertheless, against the international background of the late twentieth century, sex and gender education has started to challenge this deep-rooted consciousness. Today's bashing is an arises from those who feel threatened by these changes and try to prevent it by inciting people's anxiety and fear.

We do not have any official powers or authority. However, we are unwavering in our determination to fight for an education system which places value on life, sex, and human rights for the happiness of children and humanity. We wish to work towards achieving this difficult but rewarding goal through active engagement and debate with not only those in the field of education but also medicine and welfare, as well as parents, guardians and citizens.

full text --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/e/c_feature/newsletter006/
Yukihiro MURASE, Representative,
The Council for Education and Study on Human Sexuality

女性学会報告

2006年6月10・11日、日本女性学会大会が大阪ドーンセンターで開催された。大会のシンポジウムでは、「ジェンダーをめぐる暴力とトラウマ——暴力への対抗としてのフェミニズムの希望のあり方」をテーマに、宮地尚子氏（一橋大学）、大越愛子氏（近畿大学）、木村涼子氏（大阪大学）の3人がパネリストとして報告と議論を行った。

宮地氏は、精神科臨床医としての経験から、「性暴力やDV被害者との臨床から学んだこと」というテーマで、トラウマ、暴力、ジェンダーについての報告を行なった。トラウマは、例えば、実際に殴られるのではなく、「殴るぞ」という状態に長期間置かれるというような経験によって引き起こされる心の傷である。そのトラウマが持つ、目に見えない暴力・傷・その連鎖を可視化することと、そのような暴力の予防とそれからの回復支援の必要性を訴えた。

大越氏は、フェミニズムは、性差別を問題化する思想から、ジェンダー二元論体制を構成している構造的暴力に抗い、それを解体する思想へと変容したと論じた。その契機となったのが日本軍性奴隷制問題であり、サバイバーの告発は、軍事化された国家暴力やジェンダー化を強要するヘテロセクシズムなどのジェンダー二元論体制を必要とする構造的暴力を明らかにしたという。とりわけ、2001年12月にハーグで出された「女性国際戦犯法廷」の判決が、性暴力につきものである「合意」の定義を明確にするなど、フェミニズムが非暴力思想を深化させる可能性を示した。

木村氏は「フェミニズムの観点から教育と「暴力」を考える」と題する報告を行なった。木村氏は、まず、学校教育が性別分化を制度化し、また、男女別男子優先名簿に見られるように、様々な学校慣習が性差別を内包した「隠れたカリ

キュラム」であったことを指摘した。そして、現在のジェンダー・フリー・バッシングは、「学校教育を舞台としたヘゲモニー争い」であり、これまでの着実な実践が育ててきた新しい家族形態やセクシュアリティの多様性の認知などが後退させられる危機に面しているという警告を発した。

個人の経験にまとめられがちなトラウマを、ジェンダーの視点から分析し、構造化された暴力の分析へとつなげ、さらにそれに対抗するための可能性としてフェミニスト・ペダゴジーへと議論を発展させようとしたシンポジウムの試みは、時宜を得たテーマであったと思う。しかし、司会の伊田氏が言うように、暴力の多様で重層的な性格に鑑みれば、どのような暴力のどのような側面について語っているのかを、より注意深く議論しなければならなかっただろう。現在の日本におけるジェンダー・フリー・バッシングや世界各地での武力紛争の悪化という非常に厳しい現状を根本的に変えるためにも、本シンポジウムでの議論が深化され、そして実践へと導く場の模索は継続されなければならないだろう。

2006年度日本女性学会大会プログラム

協 賛：大阪府立女性総合センター
日 時：2006年6月10日(土)・11日(日)
場 所：大阪府立女性総合センター（ドーンセンター）
〒540-0008 大阪市中央区大手町1丁目3-49 TEL.06-6910-8500
京阪・地下鉄谷町線「天満橋駅」下車、徒歩5分
参加費 会員：無料 非会員：1,000円

第1日目6月10日(土曜日)

場 所：7階ホール 開場/受付：12時30分
シンポジウム：13時～16時30分
テ ー マ：ジェンダーをめぐる暴力とトラウマ
——暴力への対抗としての、フェミニズムの希望のあり方

パネリスト：宮地尚子、大越愛子、木村涼子 コーディネーター：伊田広行
総 会：17時～18時（この日、非会員の方にはビデオ上映を行う予定です。）
懇 親 会：18時～20時 1階レストラン「エイマール」 会費4,000円

第2日目6月11日(日曜日)

個人発表
ワークショップ 午前の部：10時～12時30分 午後の部：13時50分～15時30分

2006年度
日本女性学会大会プログラム

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/c_/006/
立命館大学助教授：秋林こずえ

Feature: Feminism

The Women's Studies Association of Japan

The Women's Studies Association of Japan held its Spring meeting at Dawn Center in Osaka on June 10th and 11th, 2006. On June 10, a panel discussion entitled "Violence, Trauma and Gender: Hope from Feminism in Resistance to Violence" was held with three panelists: Naoko Miyachi (Hitotsubashi University), Aiko Ogoshi (Kinki University) and Ryoko Kimura (Osaka University).

The first presenter, Miyachi, spoke about issues of trauma, violence and gender from her experience as a psychiatrist for victims of sexual assault and domestic violence.

The second presenter, Ogoshi, is a researcher of Western philosophy, and secretary general of the Association for Research on the Impact of War and Military Bases on Women's Human Rights. She argued that feminism has changed its direction from problematizing sexism to resisting and dismantling the structural violence that constructs gender dichotomy.

The final presenter was Kimura, a researcher of educational sociology as well as co-author and editor of *Gender Free Trouble* which analyzes the recent backlash in Japan. She reminded us that school education institutionalizes the gender divide and, as seen in the gendered class-roster that places boys first, various practices at school have in fact been a 'hidden curriculum' of

sexual discrimination. She warned that the current 'gender-free bashing' threatens the steady efforts and achievements until now in furthering the acceptance of diverse sexualities and of various forms of family.

The purpose of the panel discussion itself was ambitious and timely considering the current escalation of various forms of violence in many parts of the world. The original intention appeared to first analyze trauma, which is often understood only within a framework of individual experience, from a gender perspective, and then to proceed to a structural analysis of violence. Feminist pedagogy, then, can be discussed as a potential resistance to structural violence. However, the discussion did not fully succeed in presenting a common understanding of violence, which, as described by Ida, the moderator, has many varieties and layers. A more detailed discussion and debate of violence itself is required in future. This symposium perhaps marks the beginning of a long-term endeavor by feminism to bring about fundamental change in this violence-ridden world in which we now live.

full text --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/e/c_feature/newsletter006/
Kozue AKIBAYASHI

Associate Professor, Ritsumeikan University

フェミニズムとの出会い

鄭新蓉教授の指導を受けるまで、私は教授がフェミニストであると知らなかったし、それを知った後でも、教授のフェミニズムに対する熱意が、いかに私に影響を与えているかについては想像することができなかった。

2002年、中国の広州で開かれた女性学セミナーで「ヴァギナ・モノログ」に関する分科会に参加した私は、そこで女性器がさらけ出され、考えられ、語られているのを見て深い感銘を受けたが、私はこのときになってやっと自分の未来がどこに向かって進んでいるのかを知ったのである。

分科会で聞き出したことに思いを巡らせる中で、私は自分の考えが徐々に変化していくのを感じた。そしてその後大学に戻ったときには、その新しい考えを真剣に語るようになった自分を発見するに至ったのである。このように、このセミナーは私に大きな影響を与えてくれた。一言で言えば、このセミナーがフェミニズムへの扉を開いてくれたのだ。

ある人がフェミニズムと出会って、そこからそれを受容するようになるまでの道のりは、ゆっくりと段階的に進むように思う。しかし様々な障害（中国ではフェミニズムが批判されていることや、フェミニズムの議論を現実に照らし合わせて考えてこなかった為に、私自身がしばしばフェミニズムのいくつかの考えを受け入れることができなかったことなど）にもかかわらず、私はフェミニズムを学ぶことをためらいはしなかった。私の場合、この過程で最も役立ったのは議論だった。私と私の友人たちは、フェミニズムは議論のプロセスを通してこそ、より説得力を増し、私たちの心をより惹きつけるようになるのだと信じている。

フェミニズムは社会を分析するのに有用な視点を提示してくれる。フェミニズムの視点から自分自身の経験を振り返ることは、だからこそ、既存の社会構造を理解する上で良法となり得るだろう。私は中国南部の小さい町の出身であるが、

残念ながら、私の誕生は家族にとってあまり良いニュースではなかった。私は第二子で、当時は政策によって第三子も受ける事が出来なかったのに、生まれてきた私が姉に続いてまたも女の子であったことに父は失望したのだ。このように、私は幼少の頃からジェンダー格差がもたらす影響を痛感させられてきたのだが、しかしより重要なことは、この経験が私の個人的な悲劇にとどまらないということである。これは、間違いなく私たちの社会を覆う男性優位の反映なのだから。

フェミニストとは、それ故に、男女間の平等な地位を求めて格闘し、不利な状況におかれた人々の権利のために闘い、既存の社会システムでは生き残れない人々に発言権を与える人を指すのである。

私は最近、中国の北京師範大学にある多文化教育研究センターのボランティアスタッフになった。私はセンターの活動を通して、ジェンダー、マイノリティ、階級といった沢山の要素が組み合わさって、女性や少女の発達・発展を阻む複雑な社会構造をかたちづけているのだということを実感した。しかし同時に、多くの女性が教育の現場で、この難しい状況に対抗せんと格闘していることも知った。われわれ、センターのスタッフたちは、そのような女子学生や女性教員、そして私たち自身のさまざまな課題への挑戦を支援しているのである。

終わりに、この世界を理解し、認識する新しい方法を与えてくれたフェミニズムに感謝したい。フェミニストの視点から見れば、既存システムの不正と不公平を変えるための限りの原動力を、ひとりひとりが持っている。フェミニズムが私の人生を変えた、これからも私に影響を与え続けるだろうと信じている。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/c_/006/
北京師範大学、教育学院：林玲

When I Met Feminism

In 2002, I attended a meeting on the "Vagina Monologues" organized for the Chinese women's studies seminar held in Guangzhou. Exposed to the private part of the female body which was shown, thought of, and spoken about, I was deeply impressed and felt some of my opinions changing slowly. Upon returning to my university, I found myself talking about my new ideas seriously. This seminar had a significant impact upon me: it opened the door for me to feminism. The process that one follows from one's initial encounter with feminism to acceptance develops gradually. What has helped me most of all is argument. Through the process of argument, I believe, feminism is becoming more persuasive and convincing for my friends and for me.

Feminism presents a useful perspective for analyzing society. Reflecting upon personal experiences from a feminist's point of view, therefore, could be a good way to understand the existing social structure. Born in southern China, my birth was regrettably not good news because I was the second girl and my parents couldn't have any more children according to the governmental policy. My father was disappointed because he longed for a boy. Thus, from early childhood, I have been made to feel the effects of the gender gap. What is more, this is not merely a personal tragedy.

It is surely a reflection of the male dominance in our society. Being feminist means, therefore, to struggle for the equal status of men and women, to fight for the rights of the disadvantaged, and to give voice to those who cannot survive in the current social system.

As a volunteer staff member working at the Multicultural Education Research Center at Beijing Normal University in China, I have discovered that many elements---gender, minority, class---are interlaced into a complex social system which arrest the development of women and girls. At the same time, however, I have also found that many women are struggling against this difficult situation. My team at the center encourages female students and teachers as well as ourselves to face challenges.

In conclusion, I wish to express my appreciation for feminism which has provided me with a new way to perceive and recognize this world. From the feminist's point of view, I think individuals have an endless drive for changing the unfairness and inequality in the current system. I believe that feminism has changed my life and that it will continue to influence my future.

full text --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/e/c_feature/newsletter006/
Ling LIN

Graduate Student, Beijing Normal University

CGSからのニュース

報告：尾辻かな子氏講演

2006年5月23日、国際基督教大学において、大阪府議会議員で昨年レズビアンであると公表した尾辻かな子氏による講演会『虹色』の社会を目指して」が行なわれた。

講演の中で特に強く共感したのが、氏が若い頃抱いていたという「この気持ちを認めたら、何か大変なことが起きるのではないか」という恐れだった。当事者にとって「自分へのカミングアウト」は時に非常に困難である。

しかし尾辻氏によれば、自分の気持ちを認めた後も、レズビアンコミュニティで本名などを明かせないといった問題は残ったという。氏はここから「これは私たちの問題ではなく、社会の問題なのではないか？」と、社会の側の無関心に目をむけ始め、やがて政治の世界に興味を持つようになった。これが後のカミングアウトにもつながっていく。

講演後の氏との茶話会では、カミングアウトの持つ重要な意味を実感させられた。参加者たちが、自己紹介の中で自然と本名やセクシュアリティを公言したのである。尾辻氏にも新鮮だったであろうあの光景は、それまでゲイのクラブやバーでフルネームを名乗ることの少なかった私自身にも、その後フルネームを名乗るきっかけとなった。また、その中で異性愛者も「カミングアウト」するのを見て、「マイノリティがするもの」と思われがちなかミングアウトを異性愛者がすることにも、そういった社会通念を揺さぶるものとして大いに意味があると感じた。



Ms. Kanako Otsuji

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/c_/006/
東洋大学社会学部：竹達英司

報告：三橋順子氏講演会

2006年5月8日、「ジェンダー研究へのアプローチ」の授業の中で、女装家であり性社会史研究者である三橋順子さんが講演を行った。タイトルは「トランスジェンダーをめぐるセクシュアリティ」。「トランスジェンダー」に対する認識を改めさせられるような、新宿女装コミュニティについてのお話であった。

まず、私が驚いたのは、女装者に魅かれる「女装者愛好男性」の存在である。彼らは「女らしさ」に比重を置く結果、「女性ジェンダー記号」を女性よりも過剰に身に付けた女装者が性的対象になるということが新鮮であった。

また、女装者には、男性と性的な関係を持ちつつも恋愛対象・性的対象は女性であり、その“対象として好ましい女性像”に自ら「なる」タイプもいるという。このようなあり方は社会一般には変わった存在に映るだろう。しかし、自分の好きなものに同化したいと思うのは、実はごく自然な感覚である。これが「女装」、つまり性の越境を意味する限り「不自然」なものと見なされるのは、性の有り様の硬直性、性の多様性への理解不足が原因であろう。

現在当たり前とされている性の「規範」は限られた人だけを適格者と認めるものであり、その意味や妥当性は問い直される必要がある。男性としての人生と「女性」としての人生の両方を生きる三橋さんのようなトランスジェンダーの存在は、ジェンダーに関してより自由な感覚を多くの人に与えるきっかけとなるだろう。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/c_/006/
ICU 学部：今川あい子



Ms. Junko Mitsuhashi

News from CGS

Towards a Society that Celebrates Diversity

On May 23, 2006, Osaka councilor Kanako Otsuji gave a lecture at ICU entitled “Towards a Society that Celebrates Diversity.” Otsuji talked about the personal experiences which led to her publicly coming out as a lesbian last year. I particularly empathized with what Otsuji said about her early fears of what would happen if she allowed herself to recognize the feelings she felt inside. Even after she admitted to her feelings, there was still the issue of not using her real name in the lesbian community. Realizing that this was not a problem of the individual, but of society, She came to question this social apathy and became interested in politics.

The significance of ‘coming out’ was brought home to when the participants all declared their real names and sexuality in their self-introductions at the post-lecture tea party. It was a significant step for me personally, because until then I had hardly ever given my full name in gay clubs or bars. The heterosexuals in the group also announced their sexuality. I felt that this represented a significant challenge to the commonly held view in society of ‘coming out’ as something only for minorities to do.

full text --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/e/c_feature/newsletter006/
Eiji TAKETATSU
Undergraduate Student, Toyo University

REPORT: Junko Mitsuhashi Lecture

Ms. Junko Mitsuhashi gave a guest lecture, entitled ‘Sexuality in Transgenderism’, for the course “Approaches to Gender Studies” on May 8, 2006. She is an outspoken transvestite and a researcher in gender social history. The talk focused on the transvestite community in Shinjuku and prompted us to rethink our ideas on transgenderism.

Hearing of the existence of so-called ‘male lovers of transvestites’ surprised me. The sexual orientation of transvestites is also diverse. For example, there are those who are sexually and romantically attracted to women, despite the fact that they actually have sexual relationships with men. For such people, it is natural to identify themselves with their chosen sexual object.

The sexual norm which is taken for granted in society today applies to only a limited set of people and excludes others. The validity and implications of the norm must therefore be reassessed. The existence of transgenders such as Ms Mitsuhashi, who lives the life of a man and that of a ‘woman’, helps to liberate us from the cryptic tether of gendered social codes.

full text --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/e/c_feature/newsletter006/
Aiko IMAGAWA
Undergraduate student, ICU

報告：堀江有里氏講演

2006年3月、ジェンダー研究センター（CGS）は堀江有里氏を迎え「キリスト教と性的マイノリティ」と題した講演会を二日に渡って開催した。氏は大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程で学ぶ傍ら、日本基督教団牧師、また「信仰とセクシュアリティを考えるキリスト者の会（ECQA）」代表として、性的マイノリティが直面する差別に教会内外で積極的に発言してこられた。多くの教会・教派を揺るがす同性愛の問題をレズビアンであり牧師である氏に語っていただいた今回の講演は、キリスト教精神に立脚する本学にとって非常に大きな意義があった。

堀江氏はまず、教会もまた日本社会に蔓延するホモフォビア（同性愛嫌悪）と無縁ではない、寧ろ差別の温床となり得るのだと指摘された。ホモフォビアを形成する要因として、アイデンティティの自己表象としてのカミングアウトが単なる「行為の告白」として安直に認識される結果、同性愛者が包括的な、また複雑な人格ではなく、性的存在に還元されてしまう点があげられる。ECQAの代表として、電話相談によるピア・サポートを通して、「同性愛者としての自分」と「クリスチャンとしての自分（同性愛を直したいという願望、牧師の無理解、教会に行かなくてはという義務感）」の間で引き裂かれる人々の相談にあたり、教会内でホモフォビアに起因する差別と日々闘う氏は、異性愛主義（もしくはその自覚の欠如）と男性中心主義に根ざし、個々人の現状を看過した釈義論争ではなく、マイノリティにとって安心できる場の確保など、現場に立脚した神学こそが必要だと訴えられた。そのために「キリスト教は同性愛をどう見るか」から「同性愛者はキリスト教をどう見るか」へのパラダイム転換を提言。性的マイノリティが「言葉を取り戻す」ために、説明される「客体」から説明する「主体」へ、またこのパラダイム転換を促進する上で、主に原理主義者が用いる「逐語靈感説（聖

書の文言はすべて逐語的に靈感によって記されているゆえに無謬とする説）」にのっとった「伝統的」聖書解釈にかわって、解釈の多様性を可能にするクィア・リーディングを紹介された。

聖書釈義は時代の制約を免れず、常に読み手または解釈者の視座、対象、歴史背景を含む。ならば、聖書の言葉に忠実に現代を生きるとはどういうことか。聖書釈義の多義性をどう理解し、信仰と行為をどう一致させるのか。真の教会の交わりはどうあるべきなのか。神学もまた脱構築と再編を強く迫られているのだと痛感した。

堀江氏はしかし、講演タイトルにあるような「性的マイノリティ」全般を語ることはしない。男性中心主義、異性愛主義という社会全体を覆う価値観の中で、女性また同性愛者として二重に力を奪われる立場を「レズビアン不可視性」と氏は称したが、この不可視性故に教会内のレズビアンはより窮地に追い込まれている。暗黙のうちに、人は「男性」かつ「異性愛者」であるべきとされる社会の中で、そのどちらからも疎外される（アドリエンヌ・リッチの言う）「レズビアン存在」は、ジェンダー軸とセクシュアリティ軸の間で「引き裂かれた自己」であり、堀江氏が繰り返し批判するように、終身的単婚と次世代再生産を前提とした女性／男性の結婚のみを祝福し、家父長制を維持する教会もまた、同じようにレズビアンに堅く閉ざされているのだ。

全文 -> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/c_/006/
CGS スタッフ：井上有子



Rev. Yuri Horie

REPORT: Christianity and Sexual Minorities

The CGS guest speaker in March, lesbian pastor Rev. Yuri Horie, has been engaged in issues of homosexuality, both within and outside the church. She warned that the church could indeed create hotbeds of homophobia. One factor that forms homophobia is the mind-set that reduces one's coming-out, a manifestation of one's identity, to merely 'a confession of sexual conduct.' Thus, sexual minorities are victimized, as they are perceived only from the viewpoint of sexuality, never as individuals who are as comprehensive and complicated as heterosexuals. What the church really needs is hands-on, on-the-spot theology which welcomes everyone regardless of their sexuality, not a series of heterosexual and male chauvinistic theological debates that ignore the cries of individuals. Consequently, Rev. Horie proposed that the church should shift its traditional paradigm from 'how the church sees homosexuals' to 'how homosexuals see the church.' In order for sexual minorities to 'claim back their voices,' she introduced the multiple interpretations advocated by queer biblical reading, to replace the so-called 'verbal inspiration of the Bible,' mainly adopted by Christian fundamentalists. Yet, biblical interpretations are always subject to time constraints, and are inevitably influenced by the viewpoint of an interpreter. Then, how do we come to

terms with this ambiguity? How do we bring our deeds into line with our faith? Pondering on these questions that Rev. Horie provoked in me, I became keenly aware that the church is urgently pressed to deconstruct and reorganize itself. Rev. Horie, however, specifically avoided any comments that would represent the whole homosexual community. In terms of the deeply ingrained values of heterosexuality and male chauvinism in our society, Rev. Horie referred to the position of herself and other lesbians as 'lesbian invisibility,' doubly deprived of power not only because of their sexuality but also their gender. It is precisely because of this invisibility that lesbians in the church find themselves in even more desperate straits. In Japanese society, which implicitly expects its citizens to be 'male' and 'heterosexual,' what Adrienne Rich calls the 'lesbian existence' is alienated from both of the categories, an identity torn between the axes of gender and sexuality. As Rev. Horie insisted in her lectures, the church, which blesses only heterosexual couples for the sake of lifelong monogamy and reproduction, is even more firmly closed to lesbians than our society is.

full text -> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/e/c_feature/newsletter006/
Yuko INOUE
CGS staff member

日本からのニュース

ジェンダー概念シンポジウム報告

2006年3月25日、港区男女平等推進センターにて「ジェンダー概念について話し合うシンポジウム」が開催された。このシンポジウムはいわゆる国分寺市事件を受けて開催されたが、近年激しさを増してきた「バックラッシュ」への対抗をも目的としていた。

このシンポジウムで特に印象深かったのは、多くの議論が、フェミニズム内部に「ジェンダー・フリー」に対してさまざまな議論があったためにバックラッシュに対して後手に回らざるを得なかったこと、語の意味するところの曖昧さをバックラッシュヤーにつけ込まれたことなど、自己批判的な論調が目についた点である。

これらの批判は実に的を射ているし今後の戒めとすべきことに異論はないが、「バックラッシュ」がおきるには、こちらの落ち度だけでなくそれなりの社会的背景があるはずだ。このシンポジウムを通して強く感じたことは、この点に対してもっと考察を重ねて行かなくてはならないということである。

特に男性学の視点からジェンダー／セクシュアリティスタディーズを学んでいる私は、バックラッシュヤーたちを支える「男らしさ」幻想の力を見過すことはできない。「男らしくなれない男がそれ故に男らしさを求めて」バックラッシュに加担しているのではないか？というフェミニズムにおける最近の議論は、現在の反動的状況に対して手詰まりになっているアカデミズムにも、まだまだこの問題と対峙しうる可能性を示しているように思える。この可能性についてシンポジウムの報告と絡めて論じたい。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/c_/006/
ICU 学部：川口遼

Rainbow Talk 2006 報告

2006年3月5日、東京の学習院大学において「同性カップルの生活と法律」というテーマで Rainbow Talk 2006 が行われた。おそらく、同性婚がテーマのイベントでは、日本の歴史上最大規模のものだっただろう。

今回のシンポジウムは、主に二部構成になっており、まず基調講演で「結婚」の法学的位置づけと同性婚／パートナーシップの法的可能性についての説明があった。その後、パネリストたちが同性婚／パートナーシップへの法的保障のニーズをそれぞれの立場から語った。パネリストのメンバーもゲイ、レズビアン、MtF レズビアン、FtM ゲイと多様な立場やニーズが見えるようなものとなっており、実によく構成されたシンポジウムだった。

だが、正直に言うと、私はこのシンポジウムに少なからぬ不満を抱いた。一番問題であると思われるのは、あらかじめ法的保護が必要であるという結論に向かって、当事者の実生活の不都合やニーズばかりが語られた点である。この点にこだわるのなら、具体的な法的保護のあり方やその獲得手段に議論が割かれるべきだったが、それもなかった。つまり、現在の結婚制度からこぼれ落ちている人々が受けている苦勞や不合理な不利益を知ることができたが、それらを改善していく道筋なり希望なり情熱なりが見えてこなかったのだ。

もちろん、このようなシンポジウムが開催された事は大きな意義を持つものである。しかし、だからこそ、まとまりがなくとも、参加者との議論をより活発にしたり、法的保護の形やそれを得るための具体的な手段にも踏み込んで議論してもよかったのではないだろうか。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/c_/006/
ICU 大学院：川坂和義

News from Japan

REPORT: Symposium on Gender

The Minato City Gender Equality Promotion Center held a "Symposium on Gender" on March 25, 2006. What particularly struck me was the self-criticism apparent in many of the debates, such as the diversity of arguments within feminist circles concerning the 'gender-free' (gender equality) movement which resulted in the slow response to gender bashing, and the ambiguity of terminology which has been targeted by the backlashes.

However, I feel that despite the validity of such criticism, the emergence of a backlash is due not only to our own inadequacies but also to the social background. The symposium made me realize the need to consider this issue in more detail. Studying Gender and Sexuality from the perspective of Men's studies, I am interested in the backlash mentality, which, according to one recent feminist critique, stems from the powerful illusion of 'masculinity', that is, the underlying desire for masculinity by those men who feel inadequate in their own masculinity. In my opinion, this critique presents a possible strategy that academia can adopt and develop to counter the current reactionary climate.

full text --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/e/c_feature/newsletter006/
Ryo KAWAGUCHI
Undergraduate Student, ICU

REPORT: Rainbow Talk 2006

Rainbow Talk 2006, "Same-sex Couples: Lifestyle and Legal Issues," was held at Tokyo's Gakushuin University on March 5, 2006. The first part involved lectures outlining the legal position of 'marriage' and the legal possibilities for same-sex marriages or partnerships. The second part consisted of a panel discussion on the need for accompanying legal support. As the panel members consisted of a gay, a lesbian, an MtF-lesbian, and an FtM-gay, the discussion incorporated diverse perspectives.

I thought that the symposium was well-structured, but, to be frank, I also have a number of criticisms. I learned of the inequality and disadvantages suffered by those who do not fit into the current marriage system, yet I could not see any hope for resolution or direction for the future. Of course, the fact that such a symposium was held at all has great significance. However, that is precisely why I felt that the debates could have been more lively, and that the participants could have discussed the actual nature of legal support they needed and how they could go about achieving it.

full text --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/e/c_feature/newsletter006/
Kazuyoshi KAWASAKA
Graduate Student, ICU

2006, 夏: セクシュアルマイノリティイベント

2006年夏、日本各地で多くのイベントが実施された。私が参加した東京のイベントを中心に、2006年夏のセクシュアル・マイノリティイベントのレポートを記したい。

7月上旬に開催された第15回東京国際レズビアン&ゲイ映画祭で特に印象に残ったのは、「アジア女性クリエイター特集」で上映されたアニメ版「プリカちゃん」だ。未だレズビアンが自分の声を表明できる場の少ない日本で、レズビ안의日常生活の機微を描き続けてきた天宮沙江による原作4コマ漫画「プリカちゃん」は、レズビアンを中心に多くのセクシュアル・マイノリティを勇気づけてきた人気作品だ。今回の映画化に際しても多くの「プリカちゃん」ファンが尽力したという。ファンの声が詰まったアニメ版「プリカちゃん」の上映に立ち会えたことは、私にとっても心温まる経験となった。

7月下旬には、新宿の全労済ホール スペース・ゼロにおいて、セクシュアル・マイノリティによるアート作品の展示会 Rainbow Arts 7th Exhibition 2006 が開催された。本展では、過去最多の41名の作家が参加し、450名近くを集客した展示会となった。私は今回初めて作品出展者として参加したが、自分を表現する作品を多くの人々に見てもらうことができ、語り合う場を得られたこの展示会は、観覧者として参加してきたこれまでに比べてより楽しく、より刺激的なイベントとなった。

そして8月には、東京レズビアン・ゲイパレード2006 (TLGP2006) が開催された。2005年にTOKYO Prideを母体として3年振りの復活を果たしたTLGPだが、2年連続の開催を迎える運びとなった。CGSでは春学期より学生スタッフが中心となり、パレードの歴史や意義を勉強する読書会を開催したり、寄付を募りTLGP2006公式パンフレットに広告を掲載するなどの準備を重ね、各々のプラカードを用意し、

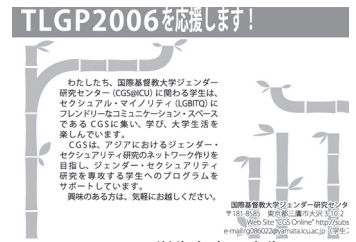
当日に臨んだ。パレード当日の東京都心はいにくの雨模様で、歩き始める1時間前には山手線が止まるほどの豪雨に見舞われ一時は開催が危ぶまれるほどだったが、幸いなことに雨は止み、2292名が隊列参加者

として、また約1500名が沿道応援・イベント広場来場者として参加し、渋谷と原宿の大通りをパレードすることができた。実行委員であるパートナーの努力を間近で見てきた私にとって、雨あがりの空はパートナーと分かち合うことのできた大きな喜びとなった。また、CGSの仲間たちや、セクシュアルマイノリティーズ・インカレ・ネットワーク「Rainbow College」の仲間たちと、それぞれのメッセージを掲げながら共に歩けたことも、忘れ難い思い出となった。また、パレードに続けて赴いたアフターパーティー、新宿二丁目レインボー祭では、パレードが多くの人々の想いや努力などの結実であることを再認識させられた。二丁目の夜空にあがる花火は、来年もまた私なりのやり方でパレードに関わっていきたく、想いを新たにする夏の締めくくりとなった。

このように、東京でも大きな盛り上がりを見せたセクシュアル・マイノリティイベントであったが、メディアにあまり取り上げられなかったこと、警察による介入があったこと、ゲイの占める割合が多かったことなど、問題点も多く存在する。セクシュアル・マイノリティのコミュニティ内の、そしてセクシュアル・マイノリティと社会とのよりよい連帯を築いていく問題提起として捉え、今後に繋げていきたい。

全文 -> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/c_/006/

ICU 大学院：加藤悠二



REPORT: Sexual Minority Events, Summer 2006

There were many sexual minority events held in Tokyo in the summer of 2006.

The 15th Tokyo International Lesbian and Gay Film Festival was held in early July. I was particularly struck by the animated version of *Plica Chan*, screened as part of a special series on 'Asian Women Creators.' This four-part comic by Saya Amamiya gave a subtle insight into the daily life of lesbians in Japan. In a country where there is still little space for lesbian self-expression, *Plica Chan* was a highly popular work which empowered not only lesbians but many other sexual minorities. For me, personally, it was a heartwarming experience to attend this screening of *Plica Chan* engulfed by the voices of its fans.

In mid-July, 'Rainbow Arts 7th Exhibition 2006', an art exhibition by sexual minorities, was held in Shinjuku. In previous years I had been merely a spectator, but this year I participated for the first time as one of the exhibitors. It was therefore a highly stimulating and enjoyable event for me as I had the opportunity to show my work of self-expression and to talk about it with many people.

In August, there was the Tokyo Gay and Lesbian Parade 2006 (TLGP2006). CGS student staff members had actively prepared for this event since the spring term, organizing a reading group that

focused on the parade and collecting funds to advertise in the TLGP 2006 official brochure. It rained hard just before the parade began, and after the long time I had witnessed my own partner's efforts as one of the organizers, the sight of the clearing sky sparked a joyful moment of empathy between us. As one of 2292 participants, cheered on by 1500 spectators and well-wishers, I will never forget marching through the main streets of Shibuya and Harajuku. alongside my colleagues from CGS and the sexual minorities network 'Rainbow College.' The after-party, the Rainbow festival in Shinjuku 2-chome, reinforced the significance of the parade as the outcome of the collective feelings and efforts of many.

However, there are still a number of problems that remain to be addressed - this great sexual minority event in Tokyo did not receive much media attention, was subject to some police intervention and was largely made up of male gays. It is hoped that the parade will continue to be considered in terms of its important role of creating better links between sexual minorities and society, as well as within the sexual minority community itself.

full text -> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/e/c_feature/newsletter006/

Yuji KATO

Graduate Student, ICU

女性の労働力問題

女性の労働力問題～日本とアジア～

これは日本から始まった現象なのだが、1950年代から多くの若い女性たちが農村部をはなれ、仕事を得るために大都市へと移住をしていった。多くは、過酷な労働条件下で働かされ、多くの女性労働者たちは自らの権利を要求するために労働組合に参加して闘った。

そのころから50年が経ち、日本はとうとうアジアの経済大国に成長した。しかし、女性労働者が置かれた状況はそれほど改善されてはいない。日本の女性労働者グループが労働組織化に関する教育に着手したのはつい最近のことすぎない。

60年代、強力な労働運動を展開し、70年代以降女性活動家が自らの問題に取り組んだ経験を国外に発信してきたことを考えると、私にとってこの現状は受け入れがたい。

50年に及ぶ経験があれば、状況は大幅に改善されてしかるべきだし、女性労働者の組織も成熟しておかしくはないはずだ。この20年間、いったい何が間違ったのか。

過去10年間、政府のとったネオリベ政策は日本の労働力市場のリストラを押しすすめてきた。その中で労働組合は多くの組合員を失うという試練を経験した。もしこのまま消極的な姿勢にとどまり、女性労働者や若年労働者、移民労働者に手を差し伸べないままであるなら、労組は近いうちにも市民社会にとって無意味な存在になってしまうだろう。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/c_/006/
元 CAW コーディネータ：メーベル・オウ

日本の女性の労働力問題

私は、1995年に個人加入できる女性のための労働組合女性ユニオン東京を結成した。この1995年は、日経連が『新時代の「日本的経営」』を出し、日本の雇用環境にとって重要な転換の年である。

この「新しい経営」とは、一部の正社員を除いて有期雇用契約の非正規雇用を増大させていく経営者側の戦略であった。この戦略を推進するメンバーにとって、「労働力は商品」なのだ。その結果、女性の非正規雇用は厚生労働省の調査でも過半数を超え、対象からはずされている者を含めると70%を超える。

現在、マスコミでも格差社会とかワーキング・プアといった言葉が頻繁に使われるようになった。現在の貧乏は戦後直後の貧乏とはわけが違う。現在の貧乏は、長時間労働に、過重労働、その上高い能力を求められているのにも関わらず、その対価が低賃金という、働きながらにして貧乏という実態なのだ。

育児休業取得率が伸びたとはいっても、子供が生まれて1年以内に70%以上の女性たちが退職に追い込まれているのが現状なのだ。企業が、女性の雇用にはコストが高くつくと考えている限り、少子化にストップはかからない。先進国日本は、この10年間の経済の回復が、貧困の拡大の上に成立したに過ぎないことを忘れてはならない。女性たちも男性並みの長時間労働を余儀なくされ、過労死は男性だけのものではなくなった。本当に、働く人たちは疲れきっている。働く人の人権を守れない社会は、その社会全体が病理に蝕まれている。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/c_/006/
女性ユニオン執行委員：伊藤みどり

Women and Labor

Women's Labor in Japan and Asia

Started in Japan, many young women migrated from rural areas to work in the big cities since the 50s. Most of them were working in harsh working condition. Many women workers joined the trade unions to fight for their rights. After five decades, Japan is already an economic giant in Asia but the situation of women workers did not improve much. The Japanese women workers groups only started to have education on labor organizing recently.

To me, it sounds ironic as the labor movement used to be very strong during the 60s and the women activists had exported their struggling experience since the 70s. With fifty years experience, the situation must be improved much and the women workers organizing must be very mature now. What went wrong in the last two decades? In the past ten years, the neo-liberal policy has pushed for labor market restructuring in Japan. The trade unions have been challenged by a loss of serious membership. If the trade unions remain in their passive position and do not reach out to women, young and migrant workers, the trade unions will become irrelevant to the civil society very soon.

full text --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/e/c_feature/newsletter006/
Mabel AU
a former CAW Coordinator

The Situation of Working Women in Japan

In 1995, I established Women's Union Tokyo, a women's labour union for individual membership. This was also a year of great change in the Japanese employment sector, marked by the Japan Federation of Employers' Associations' "Japanese-style management" for the new generation." This was a corporate manoeuvre to increase the number of workers on fixed-term contracts. According to those behind this strategy, "labour is a commodity." Consequently, the number of female workers in denormalized employment now exceeds 70%.

Although the percentage of child-care leave grants is said to be showing signs of improvement, in actuality, over 70% of women are pressured to resign from their jobs within a year of giving birth. The problem of the declining birthrate will not be relieved as long as corporations continue to consider the employment of women to be a high-cost undertaking. Women are now working as many hours as men, and death from overwork is no longer restricted to men. If a society cannot ensure the rights of its workers, it is rotting away as a whole.

full text --> http://subsite.icu.ac.jp/mt/cgs/e/c_feature/newsletter006/
Midori ITO
Executive Committee Member, Women's Union Tokyo